

朝日新聞／2018/6/14 6:00

### 社説 新潟の新知事／原発問題で主体性貫け

福島で未曾有の大事故を起こした東京電力が、別の原発を動かすことを、認めるか。新潟の新知事は任期中に、重い判断を迫られる可能性が高い。住民の安全確保や不安の解消を最優先とし、主体的に対処する姿勢を貫けるかが問われる。

新潟県知事選で、与党の支援を受けた花角英世氏が初当選した。野党5党が推した池田千賀子氏との接戦を制した。

選挙戦では、東電が再稼働をめざす柏崎刈羽原発への対応が注目された。花角氏は池田氏と同様、再稼働に慎重な姿勢を示した。自民、公明両党は原発回帰の政策を進めているが、選挙戦では前面に出ず、再稼働問題や安倍政権批判の争点化を避ける戦術をとった。

与党は知事選の結果を政権への追い風と受け止めているようだが、花角氏を選んだ民意は多様だ。おごらず、丁寧な政権運営に努めねばならない。

一方、再稼働への事実上の「同意権」を持つ新知事にまず求められるのは、選挙での公約を実行することだ。

花角氏は、前知事が進めた東電福島第一原発事故の原因や影響、事故時の避難方法に関する検証を引き継ぐと訴えた。検証結果をもとに再稼働の是非を判断する際、改めて知事選などで県民に信を問う考えも示した。

新潟県では原発への不安が強い。朝日新聞が選挙中に行った世論調査では、再稼働反対が賛成の2倍以上となった。出口調査によると、花角氏は再稼働賛成派に加え、反対派からも一定の支持を得た。多くの県民の声を重く受け止め、検証作業を徹底することは、当然の責務である。

再稼働に関して県がさらに考えるべき課題は多い。柏崎刈羽の周辺には豪雪地帯があり、実際に機能する避難体制を整えるのは難しい。東電社内で安全確保の意識や体制がどこまで改善されたかについても、国任せにせず、地元の視点でチェックする必要がある。

福島の事故以降、新潟県は原発の安全について独自の取り組みを続けてきた。東電の「炉心溶融隠し」をあぶり出し、自治体の避難計画づくりで国の関与の不十分さに光を当てたのも、その成果だ。

政権与党に支えられた新知事に対しては今後、再稼働を急ぎたい政府や東電などからさまざまな働きかけもあるだろう。それでも、独立した立ち位置で判断し、問題点を正す姿勢を保てるか。花角氏は、県民の視線が注がれていることを忘れてはならない。

読売新聞／2018/6/14 8:00

### 社説 新潟県新知事／原発再稼働を冷静に議論せよ

原子力発電所の再稼働について、冷静に議論するきっかけとしたい。

新潟県知事選で自民、公明両党が支持した花角英世氏が、立憲民主党など野党5党推薦の池田千賀子氏らを破り、初当選した。

新潟では近年、知事選や国政選挙で与党の苦戦が続いた。昨年の衆院選では、6小選挙区のうち4選挙区で野党系が勝利した。

自公両党は今回、「県民党」を標榜（ひょうぼう）する花角氏に対して表立った応援を控え、支持組織や団体の引き締めめに力を割いた。組織力を生かしたことが勝因である。

与野党対決の構図となった知事選を制したことで、支持率が低下した安倍内閣は窮地を脱したとの見方が出ている。

新潟では原発に批判的な知事が続き、東京電力柏崎刈羽原発の再稼働の見通しは立っていない。

柏崎刈羽の6、7号機を巡っては、原子力規制委員会が昨年、安全審査への合格を示す審査書を決定した。再稼働の是非は、専門的、技術的見地から判断すべきである。地方選挙で政治的な争点とすることはなじまない。

花角氏は、東電福島第一原発事故の新潟県による検証が終わるまで、柏崎刈羽の再稼働の是非を決めない方針を示した。拙速な判断を避け、再稼働問題を争点にしなかったのは理解できる。

知事には本来、再稼働に関する法的権限はない。花角氏の役割は県民の代表として政府や東電に注文をつけつつ、不安の軽減に努めることである。

花角氏は、検証終了後に「信を問う」と述べ、出直し知事選の可能性に言及している。原発問題で県民を再び二分するような事態は避ける必要がある。

新潟は人口減少が深刻で、経済の低迷も指摘されている。

花角氏は、観光振興や交通網整備、次世代自動車産業の支援などで雇用を確保すると訴えた。

国土交通省出身の官僚で、新潟県副知事も務めた経験を生かし、政府と連携して施策を推進することが求められる。

知事選は、米山隆一・前知事が女性問題で辞職したことで行われた。花角氏は県政の混乱を早期に収拾しなければならない。

野党は知事選を安倍内閣に対する「審判の場」だとし、党首クラスが連日現地入りした。新潟とは関係のない学校法人「森友学園」を巡る問題などを取り上げ、内閣批判を展開する幹部もいた。

知事選を政局に結びつける戦略は奏功しなかったと言える。

毎日新聞／2018/6/12 4:00

### 社説 新潟知事に与党系・花角氏／今後も原発に慎重姿勢を

与野党の対決が注目された新潟県知事選は自民、公明両

党が支持する官僚出身の花角英世（はなずみひでよ）氏が勝利した。

仮に花角氏が敗北すれば、今秋の自民党総裁選で3選を狙う安倍晋三首相の戦略に黄信号がともると言われてきただけに、政権側は胸をなでおろしているようだ。

ただし焦点の東京電力柏崎刈羽原発の再稼働について、花角氏が慎重な姿勢を示したことで、この問題は大きな争点とはならなかった。これが結果的に花角氏に有利に働いた面もある。花角氏は就任後も公約通りの姿勢を貫くべきである。

一昨年の参院選以来、与党は新潟で劣勢が続いてきた。今回、勝ったのは自公両党が組織力をフル稼働させたのが大きな要因だろう。一方で副知事経験者でもある花角氏は「県民党」をアピール。前知事が女性問題で辞任した後だけに、安定感を求めた県民も多かったと思われる。

対する立憲民主、国民民主、共産など野党5党は元県議を推薦し、幹部らが続々と新潟入りして安倍政権批判を続けたが、届かなかった。

森友、加計学園問題等々により安倍内閣の支持率が低迷しているにもかかわらず、野党各党の支持率も一向に伸びない。立憲をはじめ地方組織が弱いという長年の課題も解消されないままだ。ムード優先で「国政直結型」を目指す選挙戦の限界も示したと言えるだろう。

この結果、会期末を控えた国会は与党ペースになりそうだが、現状では安倍内閣への信頼が回復したとは言えない。カジノを含む統合型リゾート（IR）実施法案など、知事選で勝利したからといって強行採決に突き進むのは許されない。

花角氏の勝利で東電や自民党には柏崎刈羽原発再稼働への期待もあるようだ。しかし選挙戦では野党候補と同様、花角氏も前知事の路線継承を表明。福島第1原発事故の原因や事故時の安全な避難方法など県独自の検証が終わらなければ再稼働の議論はしないと公約した。

これまでにも独自検証で明らかになった点がある。避難計画は原子力規制委員会の安全審査の対象外で、住民の不安は根強い。これを踏まえれば県の検証には大きな意義がある。

花角氏には検証作業に真剣に取り組んでもらいたい。

## 社説 原発への不安をどう拭うか

日経新聞 2018/6/12 付

新潟県知事選で自民・公明両党が支援した花角英世氏が当選した。同氏は東京電力・柏崎刈羽原子力発電所の再稼働に慎重な構えで、再稼働をめぐり地元の不安がなお強いことを浮かび上がらせた。国や東電は地元の理解を得るため一層の努力が欠かせない。

今回の知事選は米山隆一前知事の辞職に伴う。前知事は柏崎刈羽原発の再稼働の条件として、県による福島第1原

発事故の検証などが必須としてきた。花角氏もこの路線を踏襲し、2、3年かけて検証を進める姿勢を表明した。

柏崎刈羽6、7号機は昨年12月、原子力規制委員会の審査に合格している。東電や国は地元の同意を早く得て、再稼働させたい考えだが、知事が交代しても厳しい状況は変わりそうにない。

地元の不安が強いのは、東電が福島原発事故を起こした当事者であるからだけではない。柏崎刈羽原発では2002年、原子炉のひび割れを東電が組織ぐるみで隠していた問題が発覚した。07年の中越沖地震でも火災発生時の通報が遅れ、地元は不信を募らせた。

不安や不信を拭うには、まず安全確保へ東電の粘り強い努力が不可欠だ。国の規制基準は安全上、最低限の対策を示したものだ。東電は基準を上回る安全策を積み重ね、組織や意思決定の透明性を高めることも求められる。

運転停止が長期化し、設備や機器の劣化も懸念されている。検査体制を強め、地元の結果をきちんと説明するのは国の役割だ。

花角氏にも現実を踏まえた対応を求めたい。柏崎刈羽原発の再稼働の可否は東電の経営を左右し、福島原発事故の被災地の復興にも影響を及ぼす。いたずらに判断を遅らせることは避けるべきだ。

原発問題以外でも県政には課題が多い。新潟の将来推計人口の減少率は、北陸3県より大きい。県内を訪れる外国人の数も近隣県に比べて伸び悩んでいる。新潟は政令指定都市があり、日本海側の拠点だ。新知事は地域の活性化にも全力を挙げてほしい。

産経新聞／2018/6/12 6:00

## 主張 新潟知事に花角氏／国際的視座に原発を置け

東京電力柏崎刈羽原子力発電所を擁する新潟県の知事選挙で、前海上保安庁次長の花角英世氏が当選した。

脱原発を強く打ち出した元県議の池田千賀子氏らを破ったものだ。

新潟県では、国の判断による再稼働に異議を唱える知事が、2代にわたって柏崎刈羽原発の前に立ちはだかつてきた。

花角氏には、エネルギー問題全体を展望する国際的な視点で、この重要課題の解決に取り組んでもらいたい。

それには、まず国との積極的な対話の促進が必要だ。新潟県の出身で副知事の経験を持つ花角氏であれば、円滑に県政と国政との調和を図れるはずだ。

花角氏は知事選で、福島原発事故の原因などについての検証は前任の米山隆一氏の路線を踏まえて継承するとしてきた。それなしに、再稼働の議論は始められないとの見解も示している。

この案件は、県民の不安を取り除くために進めてもらいたい。ただし、速やかな検証進展への留意と、原子力規制

委員会の安全審査との対立的な二重構造にならない舵（かじ）取りが重要だ。

歩み寄りの余地がない対立は不毛で、県民と国民の納得を遠ざけるものでしかないことを肝に銘じてもらいたい。

7基の原発を擁し、総出力821万キロワットの柏崎刈羽は、世界最大の原子力発電所である。6、7号機は昨年12月、規制委の安全審査に合格しているが、米山氏によって再稼働へのハードルが引き上げられていた。

海上における法の執行者だった花角氏には、強く再認識してもらいたいことがある。再稼働には本来、知事の法的権限は及ばない。越権行為は慎むべきである。

柏崎刈羽6、7号機は先進的なABWRという原子炉で、普通の沸騰水型の改良タイプだ。

これまでに再稼働した原発はいずれも加圧水型で、沸騰水型は皆無である。6、7号機には、他県の沸騰水型原発の再稼働の先導役としての期待もかかる。

さらに指摘するなら、原発の再稼働は、地球温暖化防止を目指す「パリ協定」で、日本が世界と足並みをそろえる手段でもある。

安倍晋三首相には、国が前面に立って、安全が確認された原発の再稼働の必要性を熱く国民に説明する一層の努力を求めたい。

中日/東京新聞/2018/6/12 10:00

## 社説 新潟・花角知事/「再稼働」判断急がずに

新潟県知事に当選した花角英世氏（60）。柏崎刈羽原発の再稼働は原発事故をめぐる県の検証結果を踏まえて判断すると、選挙戦で訴えた。県民との約束をたがえず、結論を拙速に出してはならない。

事実上の一騎打ちにもかかわらず、当選者の得票が半数に満たなかったことが、激しい選挙戦を物語る。十日に投開票が行われた、米山隆一前知事の辞職に伴う新潟県知事選。自民、公明両党が支持する前海上保安庁次長の花角氏が、立憲民主、国民民主、共産、自由、社民各党が推薦する池田千賀子元県議（57）を破った。

森友・加計学園の問題や財務省前次官のセクハラ問題などで安倍内閣の支持率が低下する中での選挙戦だった。野党側は党幹部が頻繁に同県入りして激しい政権批判を展開したが、及ばなかった。

柏崎刈羽原発の再稼働問題も県政の大きな課題だが、花角氏が池田氏同様、前知事が進めた原発事故をめぐる「三つの検証」の継承を訴えたことも、争点をぼかし、脱原発を看板に戦った池田氏に有利に働かなかった要因だろう。

「三つの検証」とは、福島第一原発の事故原因▽原発事故が健康と生活に及ぼす影響▽万一原発事故が起こった場合の安全な避難方法-を指す。米山氏はこの検証が終わらない限り、再稼働の議論はしないとしてきた。

花角氏は三つの検証を継承し、二～三年後を念頭に「検

証結果が出れば一定の結論を出し、信を問いたい」と訴えた。出直し県知事選などで再稼働の是非を県民に直接問うのは選挙での約束だ。県民の納得なく、県が再稼働の是非を一方向的に判断してはならない。

花角氏がいくら政党色を薄めて「県民党」を名乗ったとしても、自民党が選挙支援の中心にいたのは事実だ。再稼働を進める政権側の圧力にどこまで抗（あらが）えるのか。知事としての真価が問われる。

花角氏は「将来的には原発に依存しない社会を目指す」とも述べている。その言葉に偽りがなければ、検証と並行して、原発に頼らない新しい新潟県の姿を真剣に模索してはどうだろう。

野党側はあと一步及ばなかったが三万七千票差に迫った。強大な与党を向こうに回しても、野党が結束して戦えば善戦、勝利できることを示しているのではないのか。

政権追及は野党の役割でも勢力が分散しては多勢に無勢だ。新潟県知事選を教訓に、来年の統一地方選、参院選に向けた野党共闘を早急に検討すべきである。

デーリー東北/2018/6/13 0:05

## 新潟県知事選/安倍政権信任ではない

与党と野党5党がそれぞれ支援する候補による事実上の一騎打ちとなった新潟県知事選は、与党系の花角英世氏が接戦を制した。森友、加計学園問題など相次ぐ不祥事で安倍晋三首相に対する逆風が強まる中で実施された今回の選挙を、与野党とも来夏の参院選の前哨戦と位置付けていた。

与党内には激戦を勝ち抜いたことで安堵（あんど）感が広がり、自民党の二階俊博幹事長は安倍首相が目指す9月の自民党総裁選での連続3選に向けて追い風になるとの見方を示した。だが、今回の結果が、安倍政権の信任を意味しないことは与党が展開した選挙戦術からも明らかだ。

野党側が、5党首がそろって現地入りして街頭演説で「知事選勝利で安倍首相に退陣してもらおう」と訴えたのに対し、花角氏の陣営は政党色を薄めて「県民党」の立場を強調。安倍首相は応援に入らず、現地入りした二階幹事長ら与党幹部も表舞台には立たずに、企業や支援団体の組織票固めに徹した。

明確な争点がなかったことも組織票で勝る花角氏に有利に働いた。関心の高い東京電力柏崎刈羽原発の再稼働問題では、花角氏は野党系候補と同様に慎重論を訴え、野党側を「争点を隠された」と悔しがらせた。

安倍政権は新潟県知事選を乗り切ったことで最終盤に入っている通常国会で、目玉法案と位置付ける働き方改革関連法案を会期末の20日までに成立させる方針だ。さらにカジノを含む統合型リゾート施設（IR）整備法案についても成立を確実にさせるため会期を延長する方向となっている。

だが、忘れてはならないのは森友、加計学園問題の真相

解明だ。今回の知事選でみそぎが済んだわけではない。安倍首相をはじめ政府はきちんと説明責任を果たさなければならぬ。

野党側も深刻な反省が必要だ。前回の新潟知事選では野党が支援した候補が当選したが、今回は安倍政権への逆風が吹く中でも敗れた。弱体化している現在の野党陣営の体たらくを象徴している。

政権の不祥事という敵失につけ込むだけでは有権者の信頼は得られない。与党の候補に対して野党側は候補者を一本化すればいいという共闘戦術だけで、勝利できるものでもないことが今回ははっきりした。

それぞれの党が国民の琴線に触れるような具体的で魅力的な政策を打ち出していくしかない。野党が再生しなければ、政治不信ばかりが高まるといふ由々しき事態を招くことになる。

## 論説 新潟県知事選 原発へ厳しい姿勢保て

岩手日報 2018.06.12

前知事の辞職に伴う新潟県知事選は、激戦の末、与党系の花角英世氏が初当選を果たした。

同知事選が全国的な注目を集めたのは、過酷事故を起こした福島第1原発と同じ東京電力運営の柏崎刈羽原発が立地する自治体にあつて、これまで知事が厳しい姿勢を見せてきたからだ。

花角氏を支持したのは政権与党の自民と公明。安倍政権が原発再稼働を容認・推進していることから、産業界などは同原発再稼働に期待する向きがある。

しかし、花角氏は原発推進を掲げたわけではない。野党共闘候補と同様、再稼働には慎重な姿勢を示してきた。

新潟県は原発に関する独自の検証組織を設け、福島事故の原因や健康・生活への影響などを調べている。原発立地自治体のあるべき一つの姿と言えるだろう。新知事もその姿勢を保ち、強化を図ってほしい。

福島事故当時の泉田裕彦知事は、炉心熔融（メルトダウン）の公表が遅れた東電の隠ぺい体質を批判。再稼働に慎重な姿勢を示した。

前回知事選では、泉田氏の不出馬表明後、路線継承を主張して立候補した野党系の米山隆一氏が、当初優勢とみられていた与党系候補を破って当選。路線転換を期待した政権、与党に衝撃を与えた。

再稼働という争点が明確だった前回選挙と異なり、今回は与党候補も再稼働に慎重な姿勢を掲げた。争点化を避ける構図になったのは、県民世論を踏まえたからだろう。共同通信の出口調査では、柏崎刈羽原発の再稼働に「反対」と「どちらかといえば反対」を合わせると6割を超す。

同原発は6、7号機が昨年12月、再稼働に向けた原子力規制委員会の新規制基準に基づく審査に合格。福島第1と同じ「沸騰水型」で初めての合格となった。

花角氏は県独自の安全性検証について、今後2～3年間との認識を示している。検証の行方に注目したい。

原発を巡る知事選では、脱原発を掲げて当選した三反園（みたその）訓（さとし）鹿児島県知事が、九州電力川内（せんだい）原発の稼働継続を容認したため、反原発派から批判を受けている。立地自治体では住民の視線が厳しくなっていることを肝に銘じたい。

再稼働が大きな争点とならなかった今選挙。有権者が花角氏を選んだのは、官僚出身の行政手腕に対する評価や中央とのパイプへの期待が要因とみられる。

来夏の参院選に向けた前哨戦とも位置付けられたことから、与党は弾みとしたいようだ。しかし野党候補との得票差は大きくない。公文書改ざんなど政権の不祥事に対する批判は根強いのではないかと。

信濃毎日／2018/6/12 10:05

## 社説 柏崎刈羽原発／新知事は約束果たせるか

新潟県知事選で自民、公明が支持する花角英世氏が野党推薦の候補を破り、初当選した。

東京電力が再稼働を目指す柏崎刈羽原発について、選挙戦で「県民の納得がない限り動かすことはできない」と主張してきた。当選後も安全性の検証に今後2～3年を要するとの認識を示している。

共同通信の出口調査では、再稼働に「反対」「どちらかといえば反対」とした人は計6割に上る。花角氏もそうした層から一定の支持を得た。「徹底した検証」は県民との約束である。

安倍政権は原発再稼働を進める方針を変えていない。花角氏は政権の意向に左右されず、いまの姿勢を貫かねばならない。

知事選は、前知事の米山隆一氏が女性問題で辞職したことに伴い実施された。花角氏と、野党共闘候補の池田千賀子氏による事実上の一騎打ちの構図だった。

柏崎刈羽原発は6、7号機が昨年未、原子力規制委員会の審査に合格した。再稼働には地元自治体の同意が必要だ。東電の安全意識に疑念が残る中、前知事は、県独自の検証を行ってきた。

花角、池田両氏とも、前知事が進めた検証の継続を掲げ、再稼働に慎重姿勢を示した。原発問題では違いが明確にならなかった。

花角氏は知事選で中央とのパイプを強調。政党色は薄め、与党の国会議員らが水面下で企業・団体を回る組織戦を展開した。再稼働への慎重姿勢には、争点化を回避しているとの見方も出た。

前知事は、福島第1原発事故の原因、健康などへの影響、避難の3点で検証を進めた。地元の目線で重ねる検証の意義は大きい。

花角氏は、検証を終えて再稼働の是非を判断する際には、

「県民に納得をいただけるか意思を確認したい」と説明している。出直し知事選も検討するという。

経済産業省がまとめた2030年に向けたエネルギー基本計画の案は、依然として電力の2割以上を原発に頼る内容だ。再稼働や新增設が必要な計算になる。

福島事故後、原発の安全神話は崩壊し、コスト面の優位性も失った。再生可能エネルギーへのシフトが世界的潮流となっている。

世耕経済産業相は花角氏の当選を受け、「まずは新知事の考えをよくうかがいたい」と述べている。与党系の勝利とはいえ、政府の政策が信任されたとはいえない。花角氏は、検証にとどまらずエネルギー政策についての考え方を広く発信してほしい。

(6月12日)

## 社説 花角新知事 初心忘れず県民最優先で

新潟日報 2018/06/12

知事選は、元副知事で前海上保安庁次長の花角英世氏が激戦を制し、初当選した。きょう12日、民選第10代の知事に就任する。

花角氏は「県民最優先」を訴えて選挙戦を展開した。当選を受けて「県民に約束したことがいっぱいある。実現に向けて、しっかり取り組みたい」と語った。

### ◆再稼働どう向き合う

花角氏は「県民党」を掲げると同時に、国政与党の自民、公明両党から支持を受けた。

新知事にまず求めておきたいのは、県のリーダーとして「県民最優先」の初心を忘れず、県民全体に広く目配りした県政運営に力を尽くすことである。

選挙戦は、2年前の前回に続いて与野党対決の構図だった。花角氏と、立憲民主、国民民主、共産など野党5党が推薦した前県議の池田千賀子氏が、最後まで厳しくしのぎを削った。

前回は東京電力柏崎刈羽原発再稼働問題を巡る「原発ワニイシュー（単一争点）」の様相となり、慎重姿勢を前面に押し出した米山隆一氏が勝利した。

それだけに今回も再稼働問題についての候補者のスタンスが注目された。ただ、花角、池田両氏とも米山前知事が進めた原発を巡る「三つの検証」継続を強調し、違いは明確にならなかった。

こうした図式の中で花角氏が一定の再稼働批判票を取り込むことになり、当選という結果を手にしたのは確かだろう。

新潟日報社が実施した出口調査では、再稼働に「反対」と答えた人の7割近くが池田氏に投票したが、「どちらかといえば反対」とした人の投票先は花角氏が池田氏をわずかに上回った。

「県民が納得しない限り、原発を動かすことはできない」

「私も原発には不安がある」。花角氏はこう繰り返してきた。気がかりなのは、知事として再稼働への慎重姿勢をきちんと貫いていけるかである。

安倍政権、自民党は原発再稼働推進の立場だ。柏崎刈羽6、7号機は既に、原子力規制委員会の審査に合格している。

政権側の再稼働圧力が今後強まることも予想される中、自民党の後押しを受けた花角氏の対応に目を凝らしていく必要がある。

原発再稼働への厳しい姿勢を打ち出していた池田氏は、敗北したとはいえ50万票以上を獲得し、花角氏に約3万7千票差に迫った。選挙期間中に新潟日報社が行った世論調査では、65%が再稼働に反対の意向を示した。

「県民最優先」の県政を進めるといふなら、花角氏は原発への不安を抱く県民の心情を常に見据えておかなければならない。

それをないがしろにしては、約束を守ったことにはなるまい。

### ◆ふるさと振興に力を

花角氏は佐渡市出身で、小学生の時に新潟市に転居した。大学卒業後は官僚としてさまざまな行政経験を積み、本県の副知事も務めている。

立候補表明では知事が突然不在になったふるさとが「漂流しかねない」と危機感をにじませ、「自分が生まれ育った県の役に立てるなら」と思いを語った。

地元をよく知ると同時に、外側からも見つめ続けてきた花角氏の経歴と、地元貢献したいという熱意に期待して票を投じた有権者も多いに違いない。

花角氏は「活力ある新潟県を目指す」と強調し、公約には経済活性化や交通網の充実、観光振興などを盛った。いずれも、これまでの経験を踏まえ、故郷を元気にするために欠かせないと考えた政策ばかりだろう。

本県は人口減少が続く、県勢の停滞感が否めない。県のけん引役である花角氏には、それを打破してもらいたい。

地道に、着実に政策を実行に移す。その積み重ねこそが県民の安心を生み、郷土へのさらなる誇りをもたらすことになるはずだ。

### ◆信頼の回復も急務だ

花角氏は知事として、県庁という巨大組織を率いる責任も負う。米山前知事の女性問題による途中辞職などで揺らいだ組織を立て直し、早急な信頼回復にも努めなければならない。

県民の暮らしを下支えするべき重要な役割を担う県庁組織が内向きに陥ってしまえば、本来の役割は果たせない。

泉田裕彦元知事時代の医療・福祉関係の法定計画未策定問題を巡っては、情報公開に消極的だった県の姿勢も問われた。

足元の組織の透明性と風通しの良さを確保することは、

「県民最優先」の行政を進めていく上でも不可欠だろう。知事当選はゴールではなく、あくまでもスタートにすぎない。花角氏はそのことを肝に銘じ、より良い新潟県の未来を築くために全力を傾けてほしい。

## 社説 知事選投票日 より良い未来築く1票を

新潟日報 2018/6/10

知事選は、きょう10日が投票日だ。県民の暮らしに深く関わる県政運営を担う新たなリーダーが誕生する。

原発再稼働問題や人口減少をはじめ、新潟県は多様な課題を抱える。そうした中で、県の今後を誰に託すのか。

知事を選ぶ1票は、県政に対する県民の直接的な意思表示といえる。より良い地元の未来を築くため、一人でも多くの有権者が票を投じてほしい。

今回立候補したのは、前五泉市議の安中聡氏、元副知事で前海上保安庁次長の花角英世氏、前県議の池田千賀子氏。いずれも無所属新人だ。

このうち花角氏は自民、公明の両党が支持する。池田氏は立憲民主、国民民主、共産など野党5党が推薦する。

選挙戦は国政での与野党対決の構図と重なり、次第に激しさを増した。与野党幹部が相次いで本県入りするなど、それぞれが総力戦を展開した。

2年前の前回知事選は東京電力柏崎刈羽原発の再稼働問題を巡る「原発ワンイシュー（単一争点）」の様相となり、与野党が激しい戦いを繰り広げた。それをほうふつさせる。

政策面ではやはり、原発問題への県民の注目度が高い。新潟日報社が選挙期間中に行った世論調査で、新知事に取り組んでほしい政策のトップは「原発問題への対応」だった。

柏崎刈羽原発の再稼働についての賛否では、「反対」「どちらかといえば反対」が合わせて65%を超え、前回知事選時の調査を上回った。

世論調査では、暮らしに身近な施策の充実を求める回答も多かった。原発問題に続いて上位を占めたのは、「医療・介護・福祉」「景気・雇用対策」「教育・子育て支援対策」だ。

深刻化する人口減少への対策も欠かせない。5月1日現在の県内推計人口は昨年と同じ月と比べて、2万人以上の減少となった。1975年の調査開始以来初めてのことだ。

安倍政権で不祥事や失態が続く。与野党対決型の選挙で、国政の在り方を問いたいという有権者もいるに違いない。

一方で国政と知事選は区別して捉えるべきだと考え、県のけん引役としてより最適な人物を選ぶという県民もいるだろう。

政策や政治情勢などさまざまな事柄を念頭に置いた上で、一人一人が重視する選択基準を改めて吟味し、投票に臨む。それが、自らの意思で未来を築く第一歩になる。

今回の知事選は、米山隆一前知事が女性問題で途中辞職

したことに伴うものだ。泉田裕彦元知事時代も、福祉・医療の法定計画未策定や日本海横断航路計画を巡って県政は混乱した。

「県民益」を損ねるような県政運営を招かないために、私たち県民の側には、選挙後も知事の動向や県政への関心を持続させていくことが一層求められていると言っている。

知事選投票を通して県政に参加することは、そのスタートにもなるはずだ。

山陰中央新報/2018/6/12 12:05

## 論説 新潟県知事選/全体の声に耳を傾けて

新潟県知事選で、与党支援の前海上保安庁次長花角英世氏が、脱原発を訴えた5野党推薦候補を破って初当選した。今後、国から東京電力柏崎刈羽原発の再稼働に向けた働きかけが強まるだろう。また与野党対決を制した安倍政権からは「信任された」として森友・加計学園問題などのみそぎが済んだとの声が出始めている。

しかし、花角氏は政党色を薄めるとともに再稼働に慎重姿勢を示し、問題の争点化を回避した。陣営が安倍政権批判も繰り広げた元県議池田千賀子氏が花角氏の票の9割以上を得る善戦だったことを考えれば、再稼働が容認されたわけでも、政権が信任されたわけでもない。

花角氏は、脱原発を求める県民の声全体に向き合い、公約を順守するべきだ。安倍晋三首相も自らに批判的な世論に耳を傾け、真摯（しんし）な政権運営を心がけるべきだろう。

花角氏の動向で注目されるのはやはり再稼働への対応だ。安倍政権は、原子力を長期的に重要な電源と位置づけ柏崎刈羽原発6、7号機の再稼働に前向き。再建途上の東京電力にとっても同原発の再稼働は大きな意味を持つ。

だが、前知事米山隆一氏が始めた独自の安全性検証は道半ば。世論調査では花角氏に投票した有権者も含めて再稼働に否定的な意見が多数だった。

柏崎刈羽原発6、7号機は昨年12月、再稼働に向けた原子力規制委員会の新規制基準に基づく審査に合格した。福島第1原発と同じ「沸騰水型」では初で、事故を起こした東電の原発事業者としての適格性も認められた。

池田氏は、当初から再稼働に否定的な姿勢を鮮明にして選挙戦に臨んだ。一方の花角氏も、県独自の検証委を引き継ぐと主張、慎重姿勢を見せたため、この問題は大きな争点にはならなかった。

花角氏は当選後、検証作業には2～3年かかるとの前知事の立場を継承し、地元合意の判断に当たっては「県民に納得をいただけるか意思を確認したい」と話した。

知事選での出口調査では、再稼働に「反対」が43.4%、「どちらかといえば反対」が16.9%と約60%が反対姿勢だった。安易な同意は許されないだろう。

県は委員会です事故原因、健康と生活への影響、安全な避

難方法の3分野について詳細な検証を進めている。いずれも国の安全審査などの中で、必ずしも明確な答えが出ているとはいえない重要事項で、十分な時間をかけて検証を進めるべきだ。

検討すべきことはこれだけではない。原発を抱え、事故のリスクに直面する地方自治体にとって重要なことは、原発が地域の持続的な発展にとって本当に必要なものなのかを、長期的な視点に立って議論することだ。

福島第1原発事故から7年余。世界では再生可能エネルギーが爆発的に普及し、国内でも再生エネルギーが拡大している。原発がほとんど動いていなくても、電力不足は生じていない。二酸化炭素の排出量は減っている。

人口減少を受け、将来、どんな地域、国をつくり、そこで原発をどう位置づけるのか。新潟県民はじめ国民が納得できる形で議論を進めることが必要だろう。

佐賀新聞／2018/6/11 20:05

### 論説 新潟県知事選／世論の全体に耳傾けて

新潟県知事選で、与党支援の前海上保安庁次長花角英世氏が、脱原発を訴えた5野党推薦候補を破って初当選したことで今後、国から東京電力柏崎刈羽原発の再稼働に向けた働きかけが強まるのは確実だ。また、与野党対決を制した安倍政権からは「信任された」として森友・加計学園問題などのみそぎが済んだとの声が出始めている。

しかし、花角氏の勝因は政党色を薄めるとともに再稼働に慎重姿勢を示し、問題の争点化を回避したこと。陣営が安倍政権批判も繰り広げていた元県議池田千賀子氏が花角氏の票の9割以上を得る善戦だったことを考えれば、再稼働が容認されたわけでも、政権が信任されたわけでもない。

花角氏は、脱原発を求める県民の声全体に向き合い、再稼働の働きかけに容易に屈することなく、公約を順守するべきだ。安倍晋三首相も自らに批判的な世論に耳を傾け、真摯（しんし）な政権運営に転じなければならない。

花角氏の動向で注目やはり再稼働対応だ。安倍政権は、原子力を長期的に重要な電源と位置づけ、柏崎刈羽原発6、7号機の再稼働に前向き。再建途上の東京電力にとっても同原発の再稼働は大きな意味を持つ。

だが、前知事米山隆一氏が始めた独自の安全性検証は道半ば。世論調査では花角氏に投票した有権者も含めて再稼働に否定的な意見が多数だ。

柏崎刈羽原発6、7号機は昨年12月、再稼働に向けた原子力規制委員会の新規制基準に基づく審査に合格。事故を起こした東電の原発事業者としての適格性も認められ、福島第1原発と同じ「沸騰水型」では初だった。

池田氏は、当初から再稼働に否定的な姿勢を鮮明にして選挙戦に臨んだ。一方の花角氏も、県独自の検証委を引き継ぐと主張、慎重姿勢を見せたため、この問題は大きな争点にはならなかった。

花角氏は当選後、検証作業には2～3年かかるとの前知事の立場を継承し、地元合意の判断に当たっては「県民に納得をいただけるか意思を確認したい」と話した。

知事選での出口調査で、再稼働に「反対」が43・4%、「どちらかといえば反対」が16・9%と約60%が反対姿勢を示したのだから安易な同意は許されない。

県は委員会で事故原因、健康と生活への影響、安全な避難方法の3分野について詳細な検証を進めている。いずれも国の安全審査などの中で、必ずしも明確な答えが出ているとはいえない重要事項で、十分な時間をかけて検証を進めるべきだ。

検討すべきことはこれだけではない。原発を抱え、事故のリスクに直面する地方自治体にとって重要なことは、原発が地域の持続的な発展にとって本当に必要なものなのかを、長期的な視点に立って議論することだ。

福島第1原発事故から7年余。世界では再生可能エネルギーが爆発的に普及する一方で、原発の高コストが鮮明になった。国内でも再生エネルギーが拡大し、原発がほとんど動いていなくても、電力は不足していないし、二酸化炭素の排出量は減っている。地域に根ざした再生エネルギー事業も芽生えている。

人口減少を受け、将来、どんな地域、国をつくり、そこで原発をどう位置づけるのか。新潟県民はじめ国民が納得できる形で議論を進める責任が花角氏と安倍首相にある。

南日本新聞／2018/6/14 8:05

### 社説 新潟知事選／原発で慎重姿勢貫いて

新潟県知事選は、自民、公明支持で前海上保安庁次長の花角英世氏が立憲民主党など5野党推薦の元県議を破って初当選した。東京電力柏崎刈羽原発の再稼働問題が焦点だったが、花角氏は政党色を薄め、野党推薦候補と同様に再稼働に慎重姿勢を示した。対立軸の見えにくい戦いだったといえよう。与党の支援を得た新知事に、原発再稼働に向け国の働きかけが強まるのは確実だ。だが、県民が再稼働を容認したわけではない。花角氏は脱原発を求める県民に向き合い、公約を順守して慎重姿勢を貫いてもらいたい。知事選は女性問題を巡る前知事の辞職を受けて実施された。花角氏は企業などの組織票固めを徹底したことも奏功した。今後の県政運営でも注目されるのは再稼働への対応だ。安倍政権は原子力を長期的に重要な電源と位置づけ、柏崎刈羽原発6、7号機の再稼働に前向きだ。同原発は昨年12月、原子力規制委員会の新規制基準に基づく審査に合格し、焦点は県を含む地元自治体の同意に移っている。だが、共同通信の出口調査で、再稼働に「反対」が43・4%、「どちらかと言えば反対」が16・9%と、約60%が再稼働に否定的であることを忘れてはならない。前知事は委員会を設け、福島第1原発事故の原因や柏崎刈羽原発の事故が起きた際の住民避難計画の実効性

などを検証していた。花角氏は前知事の立場を継承して安全性検証に2～3年かけた上で、再稼働の是非を問う出直し知事選の可能性に言及している。十分に検証した上で、県民の意向を確認してほしい。福島事故から7年余が過ぎ、世界では再生可能エネルギーが急激に普及する一方、原発の高コストが鮮明になった。国内でも再生エネルギーが拡大し、原発がほとんど稼働していなくても電力不足は生じていない。原発が地域の持続的発展にとって本当に必要なのか。長期的な視点で議論を重ねるべきだ。一方、与野党対決を制した安倍政権からは、森友、加計学園問題などのみそぎが済んだとの声が出始めている。だが、安倍政権批判を繰り返した野党推薦候補が善戦したことを考えると、政権が信任されたとは言い難い。安倍晋三首相は自らに批判的な世論に耳を傾けるべきだ。柏崎刈羽原発の再稼働同意を巡っては、花角氏の意向を尊重してもらいたい。住民理解を軽視して手続きを急がせるようなことがあってはならない。